

●紙芝居と絵本は「車の両輪」

紙芝居も絵本も、優れた児童文化です。この二つの児童文化には、「共通するもの」と「全く異なるそれぞれの特性」があります。紙芝居と絵本を対比しながら、二つの児童文化に「共通するものは何か」「それぞれの特性とは何か」を考えましょう。

●紙芝居と絵本に「共通するもの」は何か

紙芝居は、1930年頃に、街頭紙芝居という形で日本に誕生しました。

街頭紙芝居は、駄菓子を売るための人集めの道具だったため、作家が自分の人生をこめて作品を作るという姿勢から生まれた作品内容ではありませんでした。

やがて出版紙芝居が作られるようになりました。出版紙芝居は、表面的なおもしろさやウケではなく、楽しさの奥底に人生をうたいあげる文化として、作家が追求するようになり、現在に至っています。

絵本は、十九世紀にヨーロッパで出版されはじめ、二十世紀には、世界中に広がって、その黄金時代が築かれました。長い歴史の中で、作家の人生が深く豊かにこめられた多様な作品が生まれるようになり、文化として発展してきたのです。

紙芝居の歴史は絵本に比べると短く、創作も研究も比較にならないくらい少ない状況ではありますが、紙芝居も絵本も、歴史的な歩みの中で研鑽されたものが、本物の文化として輝いてきたのです。

本物の文化としての「紙芝居」と「絵本」に共通するもの、それは、

『作品の奥底に、生きることの意味と素晴らしさが、凝縮し、光となっている』
ことなのです。

●紙芝居と絵本、それぞれの特性とは何か

作品の奥底にある素晴らしい光は、
『紙芝居は、紙芝居ならではの形式から作られる特性』によって、
『絵本は、絵本ならではの形式から作られる特性』によって、人々の心に届きます。

『紙芝居ならではの形式』…世界に類を見ない形式

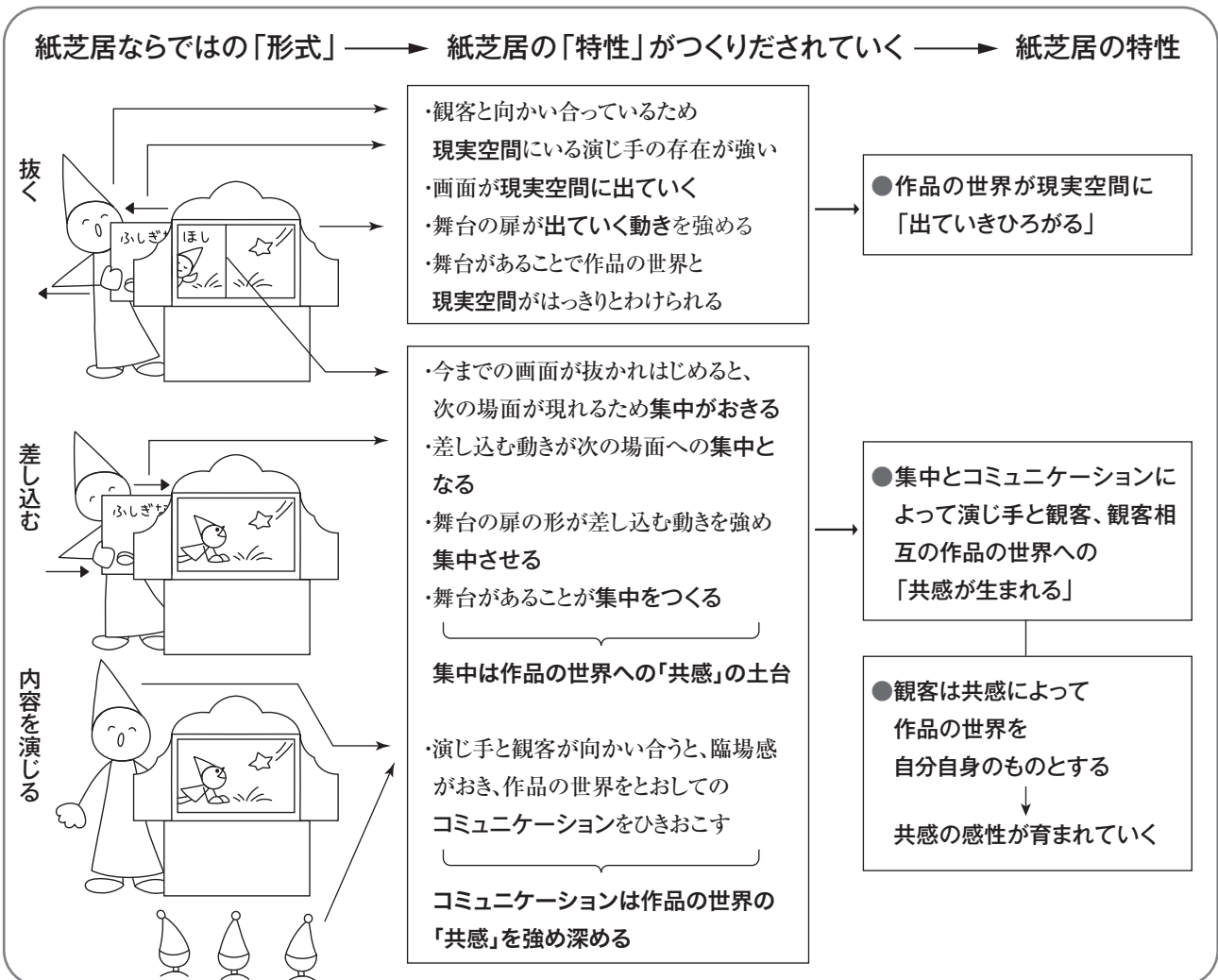
- ・画面が一枚一枚別々であるため、
「画面を抜き」「抜いた画面を差し込む」ことで進行する。
- ・画面の裏に文章があるため、
「演じ手が必ず必要」となり、
「演じ手が観客と向かい合う」ことで作品内容を伝える。
- ・画面が一枚一枚別々、画面の裏に文章があることで、
「三面開きの舞台」が使われるようになった。

『絵本ならではの形式』

- ・綴じているため、
「ページをめくる」ことで進行する。
- ・画面に文章があるため、
「読者（読み手）は本と向かい合う」

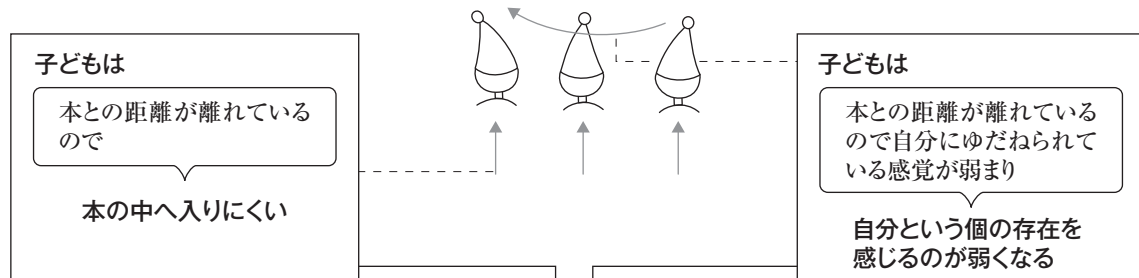
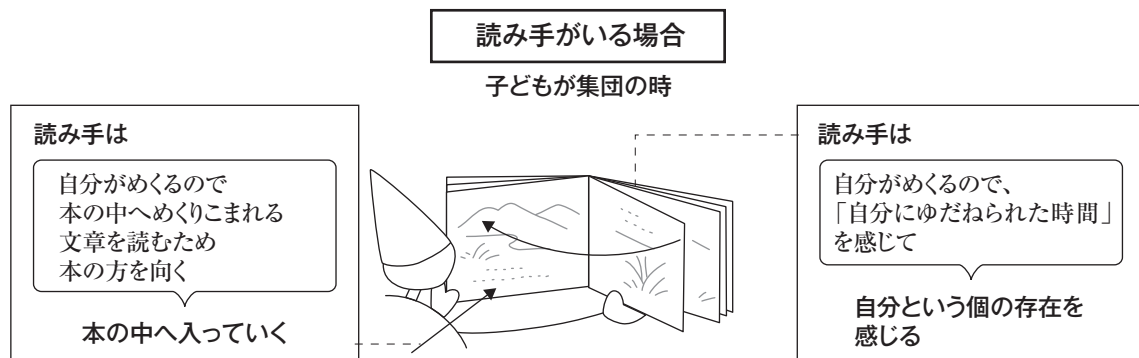
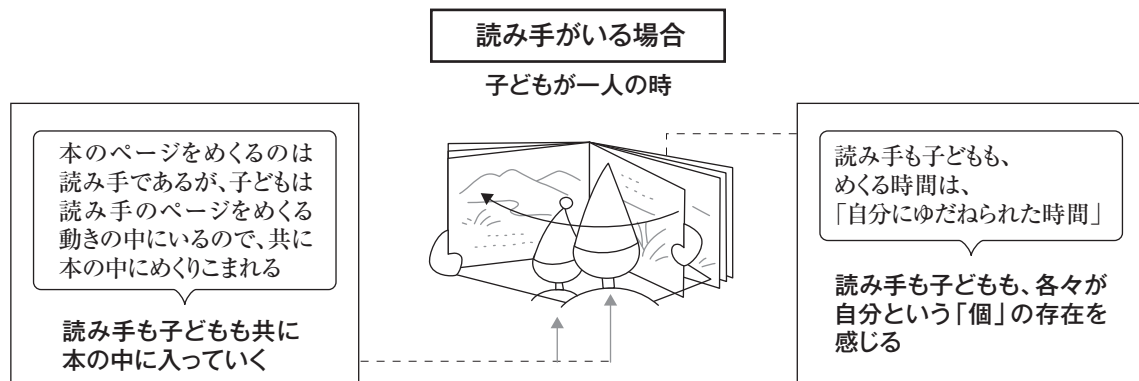
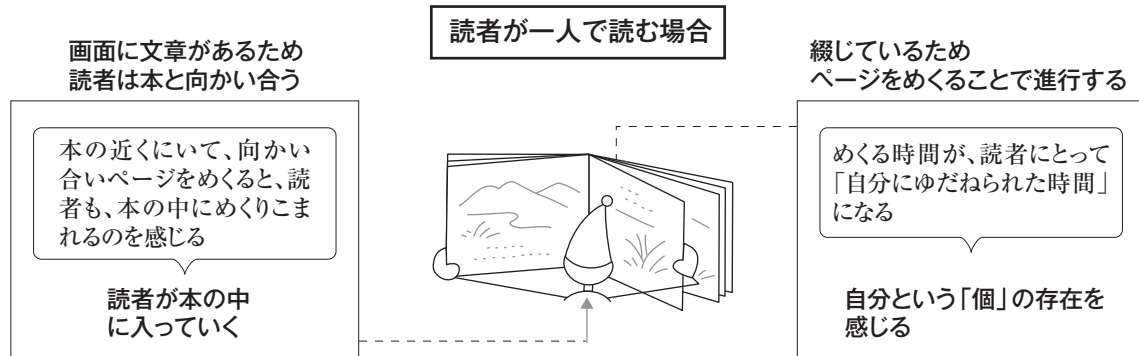
この紙芝居と絵本という全く異なる形式から、それぞれどんな『特性』が
作りだされていくかを、図版を見ながら考えてみましょう。

●紙芝居の特性●



●絵本の特性●

- 読者は画面と共にめくりこまれて作品の世界に「入っていき」
- ページをめくる時間の間に生まれた自分という「個の存在」で
- 作品の世界を自分自身のものにしていく
- そのよろこびによって読者は「個の感性」を育てていく

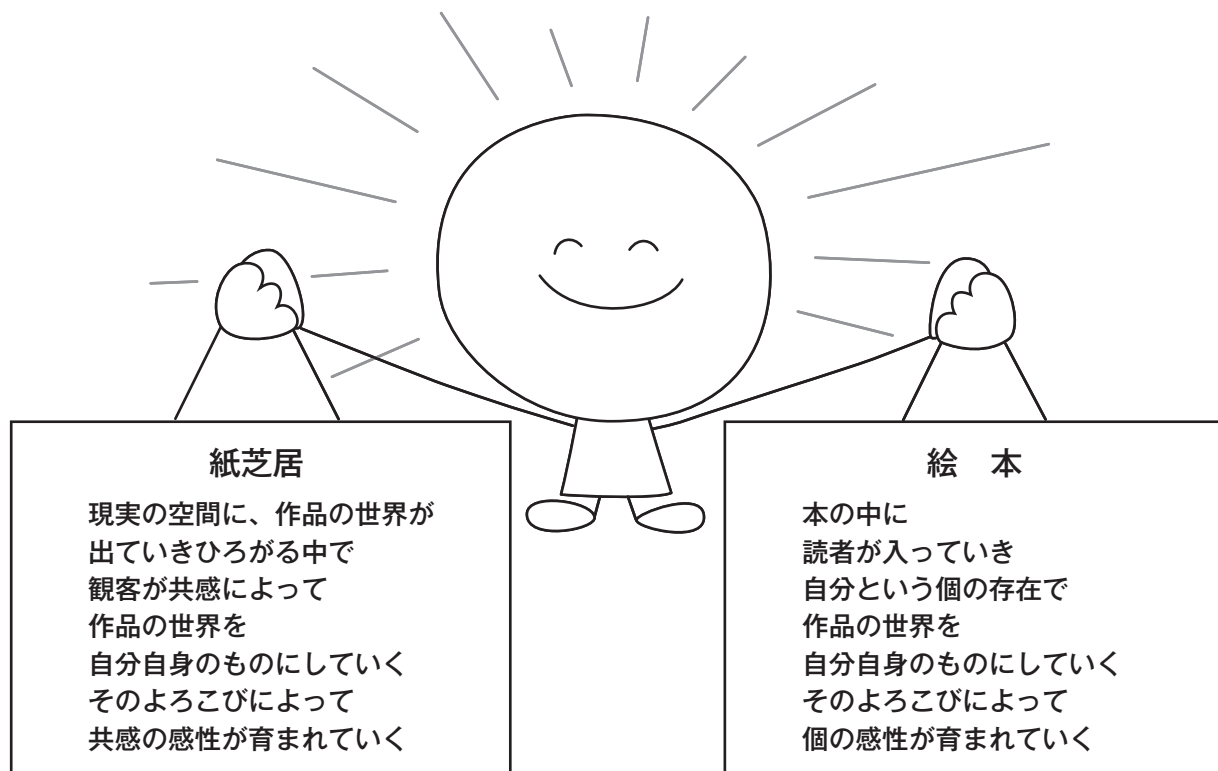


でもね

- 読み手が、本の方を向いている姿が見えるので、子どももいっしょに入りたくなり
- 読み手のページをめくる手の動きが見えるので、子どももいっしょにさそいこまれ
- 読み手の声の本の方へ向かっているため、子どもも、本の方へ向かいたくなる

でもね

- 読み手が自分という個の存在を感じながら、大事にめくると、子どもも自分にゆだねられた時間を感じることができる



個と共感というふたつの感性は、
人間が人間らしく生きていくために
車の両輪のように大切で必要なもの。
ふたつの感性があつてこそ、
生きることの素晴らしさが、磨かれ、
深められていくのです。
日本人が創りだした、紙芝居は、
この両輪のひとつである「共感」の文化として、
世界中から求められはじめています。
未来にむかって生きる子どもたちに
絵本と共に「紙芝居」を！
全ての人びとに「共感」のよろこびを！